

花壇の花を調べてみよう (後篇)

〔 花壇の花 2017年夏季 〕

ここでは、右の写真のベンチの左右にある植枡と2号棟北側の花壇を見ていきます。

【 植枡；ベンチの右側 】 ハーブ

管理事務所前の中央広場の、7号棟寄りのベンチの右側の植枡は、主にハーブが植えられています。ハーブ以外のものも植えられています。



ここです。左の写真も参照



- ・ここには何種類のハーブがあるでしょうか？
それぞれ手で触ったり、指先でつまんでみたりして、
香りを確かめましょう。
どんな香りがしましたか？

アリゾナサンドストーンはここに植えられています

○ アリゾナサンドストーン (アガスターシェ) シソ科、花期；7～11月

この植物は、「アガスターシェというハーブの、アリゾナ系のアリゾナサンドストーンという種類」とのことですが、これだけでは何のことかよく分かりません。もう少し調べてみました。

アガスターシェは、長い穂先に細かい唇形花を咲かせるシソ科の植物です。

植物名はギリシャ語で「アガ(非常に)」「スターシェ(穂)」が多いことからきているようです。

アガスターシェのさまざまな品種の中で、「アリゾナ系」のものは、矮性(草丈の低い)で分枝性のよいタイプの品種です。「アリゾナ系」の種類には、アリゾナサンセット(ラベンダーピンク色)、アリゾナサン(黄色)、そして花壇に植えられているアリゾナサンドストーン(オレンジ色)があります

(HP タキイ。次ページ参照)

いずれもオランダ原産です。ここになぜ「アリゾナ」の名が付いているのかは分かりません。

アリゾナサンドストーンはきれいなオレンジ色の花を、初夏から秋遅くまで咲き続けます。矮性で、分枝性がよく、草丈は25～30センチ程度です。それで、花壇だけでなく鉢植えでも可能です。(花壇でも、他の草が茂ってくると隠れてしまいそうな草丈です)葉にはハッカのような清々しい香りがあり、乾燥しても香りを保つので、ポプリにも使えます。



アリゾナサンドストーンの花
(左) 7/22 蕾が多かった

(右) 8/26 花の盛りは過ぎて、
あらかた散っていたが、いくつか咲いている花が見られた。

(右) 矢印の位置に、このアリゾナサンドストーンが植えられていますが、草丈が低いので、少々分かりにくいですね。



注 1) 花壇のラベルは「アガスターシャ」となっていますが、HP を検索すると、「アガスターシェ」が一般的なようです。(スペルは Agastache)

注 2) HP で「アリゾナサンドストーン」を検索すると、この植物の記事とともに、アリゾナ産の砂岩(サンドストーン)のオブジェの紹介記事が出てきます。確かに植物名「サンド・ストーン」は「砂・石」です。なぜ、このような名が付いたのかも分かりません。

なぜ「アリゾナサンドストーン」なのかいくら調べても分からず、あきらめてこの項を終えようとなりました。その時、一瞬脳裏にひらめいた事があります。「そうか、もしかして……!!」

タキイの HP に紹介されている 3 種類のアガスターシェ、そして HP を検索して出てきた、アリゾナ産の砂岩のオブジェ、それが謎を解くカギなのでは？

まず、アリゾナ系の 3 種のアガスターシェを示します。(タキイの HP より)



アリゾナサンセット



アリゾナサン



アリゾナサンドストーン

植物名「アリゾナ」に続く名前の末尾と花の色に注目してください。

- ・サンセット(日没、花の色は紫に少し赤みが差しているので夕焼け)
- ・サン(太陽、花の色は黄色)
- ・サンドストーン(砂岩、だいたい色は大地の色、アリゾナ州グランドキャニオンは堆積岩の浸食によるもの。それで砂岩で大地を意味する)

このように連想してくると、3種の名前の意味するところは、「アリゾナの大地に照りつけるギラギラ太陽、そして雄大な夕景」。まるで絵画を見ているような連想の広がりです。

そしてもう一步、連想の輪を広げて、「オランダにアリゾナに思いをはせる植物学者がいて、ワイルドなこれらの植物にその思いを託して名付けていった!!」

ごめんなさい、こんないいかげんな事を書いて!! 的を得ているかどうかなどは論外です。根も葉もない私の空想ですから。でも、時にはこのような連想ゲームも面白いのではないかと思います。

○ イタリアンパセリ セリ科、地中海原産、花期；6～7月

イタリアンパセリは、ビタミンやミネラルなどの栄養を豊富に含んだセリ科のハーブです。糖質をエネルギーに変え、疲労回復にも役立つビタミン B1 などの美容や健康によい効果をもたらしてくれます。

日本でパセリ（オランダゼリ）と呼ばれているものと比べると、葉が平たく、風味や香りが柔らかい。主にイタリア料理で香味野菜として使われます。



(写真は 7/22,29)

【「パセリ」の名の由来】

この植物は、地中海沿岸の岩場に多く自生しているの
で、ギリシャ語で「岩場のセロリ」と呼ばれた。

この言葉から英語の「パセリ」となった。

(HP「語源由来辞典」から、要旨)

○ キキョウ（桔梗） キキョウ科 日本在来種

花期；6～10月

キキョウ科の多年草。日本を含む東アジアに広く分布
しています。日当たりのよい草原に見られますが、国内
ではそのような場所が激減したため絶滅危惧種になっ
ています。

(右) 写真は 8/13

万葉集で秋の七草として歌われている「あさがおの花」
は、このキキョウのことといわれています。このことか
らキキョウは秋の花のイメージが強いですが、実際の開



花期間は夏季の6月中旬から、秋の初めの9月中旬ころです。

蕾の状態では花びら同士が風船のようにぴったりとつながっているのですが、英名ではバルーン・フラワーといいます。

蕾がふくらんでいく様子を追いかけてみました。



(上左) 8/21 小さな蕾が見えた

(上中) 8/22 少しふくらんできた

(上右) 8/23 紫色になってきた

(下左) 8/24 開花

(下右) 8/24 横から見た花

このように、蕾が風船のようにふくらんでいくのが見られます。

〔キキョウ（桔梗）の名前の由来〕

桔梗の根は漢方に用いられ、薬用として処方されます。その薬用処方時に使われる名前が「キチコウ」と漢名「桔梗」を音読みにします。それが「キキョウ」に変化したとのこと。(HP「先読みトリビア」)

○ キンレンカ(金蓮花) ノウゼンハレン科

花期；6～10月

さまざまなハーブの中にキンレンカと思しき葉が見られました。花は付いていませんが、この特徴的な葉はキンレンカのものでした。去年は気付きませんでした。いつキンレンカを植えた事があったのかは分かりませんが、参考までに記しておきます。



○ スペアミント シソ科、花期；7～9月

スペアミントはシソ科、ハッカ属の多年草。和名はオランダハッカ。古くからハーブとして用いられています。

葉の先端がとがっているため「槍(やり)」という意味を持つ「スペア」と名付けられました。ミントの清涼感の中に感じる甘い香りが特徴です。

アイスクリームの上ののっていたり、ガムなどに使われるのもスペアミントです。

ペパーミントよりもハーブとして用いられた歴史は古いようです。



【スペアミントの名前の由来】 (HP 語源由来辞典より)

本文にも記したように、葉が槍の穂先のような形をしているため、「槍」を意味する「スペア」の名がつけられた。

「ミント」はギリシャ神話に登場する美少女ニンフの「メンタ」の名にちなんだもの。メンタは冥府の神ハデスに愛されるが、ハデスの妻のペルセポネーの嫉妬によって、草に変えられてしまった。その草がミントで、ペパーミントのことである。また、ミントが清涼感のある香りを放つのは、草に変えられてしまったメンタが、自分の居場所を知らせるため、芳香を放つようになったから。

○ チェリーセージ (サルビア・ミクロフィア)

シソ科、多年草、花期；4～7月、9～10月

アメリカ南部・メキシコに分布する低木性のサルビアです。

高さは 1.5m ほどになり、こんもりと大きく茂ります。茎の先端から花穂をのぼして、ちらほらと花をつけます。一度に咲く花の数は少ないですが、茂ってくるとたくさん花穂を出し、初夏から秋まで咲き続けます。ただし、夏の暑さで8月は花が付きづらくなりますが、枯れることはなく、秋にはまた咲いてくれます。

葉を軽くもむと、セージの香りの上にフルーティな甘みがあった香りがします。ハーブティーやポプリに利用されます。



(上) 7/22

(左、右) 8/28

・チェリーセージの葉をつまんで、香りを確認しましょう。セージの香りの中に、サクランボのような甘い香りがあるでしょうか。

・チェリーセージはサルビア・ミクロフィアの名がありますが、この花とサルビア（赤）の花を見比べてみましょう。どのように似ていますか？

【セージの名前の由来】（HP 語源由来辞典から、要旨）

セージはギリシャ・ローマ時代から薬用として用いられたことから、ラテン語の「治癒力のある植物」の意味から「サルビア salvia」と呼ばれ、ここから英語で「セージ sage」となった。

○ **バジル** シソ科、多年草（日本では越冬できないので1年草扱い）

インド、熱帯アジア原産のシソ科のハーブ。日光を好み、寒さが苦手な事から、本来は多年草ですが、日本の園芸では一年草として扱われます。

甘みのあるさわやかな香りのハーブで、肉料理、魚料理、パスタやピザなどさまざまな料理の味を引き立て、イタリアからエスニックまで幅広く使われます。



【バジルの名前の由来】

「バジル」は、ギリシャ語で「王」を意味する「バシレウス」に由来します。

高貴な香りがすることや、貴族が香料に用いたことから、「王のような高貴な草」という意味で、この名が名付けられたと言われています。日本で「バジリコ」と呼ぶのはイタリア語由来の呼び名です。

（HP 語源由来辞典から要旨）

※ **なぜ和名がメボウキ（目簾）なのでしょう？**

ホームページを検索すると、次のようにいろんな話が見つかりました。

a1) 日本には初め、種子が漢方薬として輸入された。和名のメボウキ(目簾)の由来は、そのゼリー状の物質により目の汚れを取り去る目薬とされたことから。(HP 巡礼クラブ、wikiwand)

a2) 日本にバジルが渡来した当初、目に入った埃を取る薬として使われたので。(HP 先読みトリビア)

b1) この植物の小さな黒い種子を眼の中に入れると、水分を吸って、カエルの卵のように寒天状に膨れて、目のゴミをぬぐい去ったことから。(HP kami-chan 花言葉)

b2) 種子を目に入れると、ゼリー状の物質が出てゴミを取り去ったことから。(HP Weblio 辞書)

c1) 種は黒で、グルコマンナン（コンニャクマンナン）を多く含み、水につけると種の表面がふくらんで、半透明の白っぽい粘膜に包まれます。この粘膜で目の中に入ったごみがとれることから。

（HP やさしい園芸）

c2) バジルの種を水に浸してゼリー状にして、目薬として使用していたことから。

目に入った悪い細菌などを掃除してくれる存在として扱われていたのかもしれない。

HP によってかなりニュアンスが異なります。私には、この是非を論じる根拠(原典)がありません。が、これを読んでいると色々な疑問がわいてきます。

a1) 漢方として薬成分を抽出して目薬にしたらしいが、「目の汚れ」とは何でしょう。目の濁り、白内障の薬でしょうか？それでは「ホウキ」の意味から遠のきます。a2)は「埃」となっていますが、無批判に要点を記しただけ。

b1)b2) これは少々乱暴な話ですね。目にゴミが入って痛くて開けられないのに、さらに細かいバジルの種を眼の中に入れるのでしょうか？

c1)c2) いずれも種子を水に浸して使うようですが、家庭菜園をする人もいるでしょうが、バジルの種がそんなに身近にあったのでしょうか？ しかも、c2)の投稿者は何らかの疑問を感じ、「悪い細菌の掃除かな」としています。それなら「抗菌」の眼薬ですね？

もう少し整理しましょう。

基本的には、「バジルの種子、そこから出てくるゼリー状の物質」という部分は、おおよそ共通しています。が、かなりの意味の変更点に気が付きます。

- ・ 種子(固形)を目に入れる → 目薬(水溶液の可能性)
- ・ 種子を目に入れる(自己療法) → 目薬(市販の可能性)
- ・ メボウキ(ゴミ、埃のイメージ) → 目の汚れ(目の濁り？白内障？)
細菌の掃除 (抗菌のイメージ)

C2 の引用者も疑問を感じているように、それぞれの引用者も何らかの疑問を感じ、一部変更しながら引用し、さらに孫引きされていくうちに、さまざまに変化してきたのでしょうか。

後で再度記しますが、このような事があるから、**資料は、とくに HP の記事は、複数を読み比べて確認していく必要があるという事です。**

この話、さらに続きます。キーワードの組み合わせを変更しながら、再度検索していくうちに、製薬会社の記事を見つけました。

d) 日本には、江戸時代に中国から薬用として入ってきました。小さな黒い種子を目の中に入れると、水分を吸って蛙の卵のように寒天状に膨れて目のゴミを拭い去ったことから、「目の箒(ほうき)」にちなんで和名が付けられました。(以下略) (b1はこの記事からの引用らしい)

HP 武田薬品工業 京都薬用植物園

<https://www.takeda.co.jp/kyoto/area/plantno49.html>

ここでも、「種子を直接目に入れる」と記されています。(ホントかなあ!!)

念のため、さらに検索していくと、なんとこの事を実験した人がいるのです。

HP Dayly Portal 「バジルシードで目の掃除？」

<http://portal.nifty.com/2007/10/02/b/index.htm>

この記事、面白いのでぜひご覧になってください。

この人も、やはり直接目に入れるのはためらい、種を水に浸してみたら、ほんの10秒ほどでカエルの卵のようにゼリー状に包まれ、膨らんできたとのこと。それを目に入れて、目の埃が取れたことが報告されています。

○ **ホオズキ** ナス科の多年草。原産地；東南アジア

ホオズキは、赤いちょうちんがぶら下がったような姿が愛らしく、古くから親しまれてきました。このちょうちんのような袋は、ホオズキの萼(がく)です。

淡い黄色の花を6月～7月ころ咲かせます。この開花期間にあわせて日本各地で「ほおずき市」が開催されます。

花が受粉すると果実だけでなく、萼も非常に大きく成長し、袋状に果実を包み込みます。袋状に育った萼は、最初は緑色ですが、8月頃から朱色に色付いてきます。

果実は、昔はホオズキ人形や、口で音を鳴らすなど、子供の遊びにも使われていました。

ところが、花壇のホオズキは葉のみで、花も実の気配もありません。来年を待つしかないのかもしれないかもしれません。

写真は 8/21 →



○ **ロウヤガキ (老鴉柿)** カキノキ科

中国原産の柿の木です。和名はツクバネガキ (衝羽根柿)、実の写真を見ればなるほどと思われま(後参照)。

葉は丸みを帯びたひし形で、3月から4月に花をつけます。実は小さくとがった楕円形で、熟すとだいたい色に色付きます。しかし、この柿は観賞用の実で、実の大きさは長さ2～3センチと小さくて、渋苦くて食べられません。盆栽や庭木として広く用いられています。

ロウヤガキは、雄、雌が別々の木で、雌の木だけでも実は付けますが、種はつけず、だいたい色になる前に落ちてしまいます。

花壇のロウヤガキ→



中国名「老鴉柿」について、「老鴉」とは「老いたカラス」の意味で、タンニン分の多い実が木についたままで熟すと真っ黒になり、鴉(カラス)のようだというので、この名が付いた。「ロウア」と発音すべきところを、変化して「ロウヤ」になったのでは (HP 情報)

※ ロウヤガキが「老翁柿」と書かれる場合も多いようですが、このことから考えると、この柿が日本に入ってきて「ロウアガキ」から「ロウヤガキ」に変化した後に、その発音に合わせて「老翁柿」と書かれるようになったのではないかと思います。(追記)



羽根つきの羽根のようなロウヤガキが、赤く実が入り、しまいには真っ黒に熟していく。
(共に HP より)

【 植枿;ベンチの左側 】

中央広場の7号棟寄りのベンチの左側の植枿には、オリーブ、ケイトウ、シュウメイギクが植えられています。



○ オリーブ モクセイ科の常緑高木、地中海地方原産 花期；5～6月

オリーブの実から作られるオリーブオイルや塩漬けのピクルスは、イタリア料理に欠かせない食材です。

銀色がかった緑色の葉っぱの美しさから、最近は観葉植物として育てられることが多くなったとのこと。



銀色がかったオリーブの葉

「平和の象徴」として鳩が葉を口にくわえているデザインがありますが、あの葉はオリーブの葉です。「平和のシンボル」とされるのは、旧約聖書のノアの箱舟のエピソードに由来します。鳩がくわえてきたオリーブの枝を見て、ノアは洪水が引いたことを知りました。

また、国連の旗にも「平和の象徴」としてオリーブの葉が描かれています。
国連の旗 →



○ **ケイトウ(鶏頭)** ヒユ科 花期；7～11月 原産地；インド、熱帯アジア

ケイトウは炎のような鮮やかな花色で秋の花壇を彩り、古くから親しまれている馴染みのある花です。

和名の鶏頭(ケイトウ)は、雄鶏の赤いとさかのような花の形に由来します。

英名でも「Cockscomb (雄鶏のとさか)」と呼ばれています。学名の「ケロシヤ」はギリシャ語で「燃焼」の意味。鶏頭の花が燃え盛る炎をほうふつとさせるためです。

(今年は黄色い花が2～3本見えるだけです)



ケイトウにはさまざまな園芸品種があり

↑ 写真は 7/22

- ・トサカのようになるトサカケイトウ、久留米ケイトウの系統
- ・トサカにならないノケイトウ、ウモウケイトウ(別名フサケイトウ)、ヤリケイトウの系統があります。

花壇のケイトウは、昨年植えたケイトウから種がこぼれ生えてきたもので、ウモウケイトウ(別名フサケイトウ)の矮性種です

○ **シュウメイギク(秋明菊)**、別名;キブネギク(貴船菊) キンポウゲ科、

花期；8月中旬から11月

シュウメイギクは秋の風情を感じさせる優雅な花です。しかし、名前に「キク」が付いていますが、菊の仲間ではなく、アネモネの仲間です(科に注意)。

わが国には古い時代に中国から入ってきた帰化植物です。まず、京都の貴船地方に野生化したようで、それで、キブネギクの別名があります。

花壇のシュウメイギクは現在は葉のみですが、これからどんな花が咲くか楽しみですね。

まだ蕾も見えません 9/9 →



【 2号棟北側 】

ここは元管路収集の跡地です。見違えるような花壇に変身しています。



○ アジサイ アジサイ科の落葉低木、花期；6～7月

日本、ヨーロッパ、アメリカなどで観賞用に広く栽培され、多くの品種が作りだされました。原産地は日本で、ヨーロッパで品種改良されたものが逆輸入され、西洋アジサイと呼ばれています。

わが団地には法面にも居住区にも様々なアジサイが植えられ、6～7月に白、青、紫、または赤色の花が咲き、目を楽しませてくれます。 (写真は 7/21)



【アジサイの名前の由来】

あじさいは、古くは「あづさ朶(あぢさ朶)」であった。「あづ(あぢ)」は集まるさまを意味し、特に小さいものが集まることを表す語。つまり、“小さな花の集まった花”ということですね。

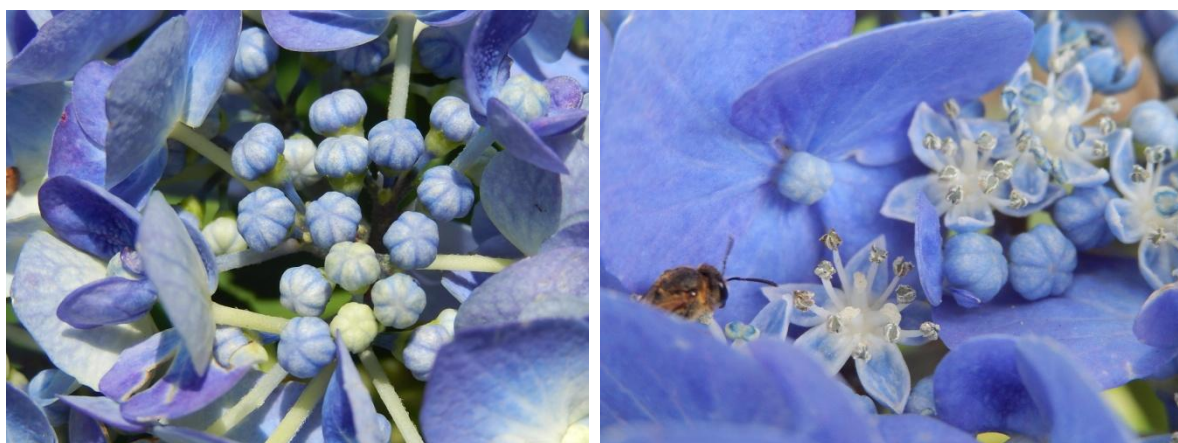
また漢字の「紫陽花」は中国の招賢寺にあった花の名前で、日本のあじさいとは異なるものであったといわれています。 (HP 語源由来辞典)

次の HP にも興味深い解説が載っています。

HP aobahigashi 「意外だった紫陽花の名前の由来」 <http://aobahigashi.web.fc2.com/ajisai2.html>

ところで、この花と見えるのは萼(がく)であることは、皆さんご存知でしょう。では、アジサイの本当の花はどこにあるのでしょうか？花びらのように見える萼(がく)をそっとかき分けて

ください。その中に見られます。



花のように見える萼(がく)をそっとかき分けて、中をのぞくと、こんな風に見られます。
これが本当のアジサイの花です。 (写真；左はつぼみ、右が開花の様子 2014 6/16)

2号棟北側のアジサイは。写真を撮った7月下旬には(前ページ)こんな花が見られましたが、7月末には、萎れてきました。今年は花の時期はもう終わりです。

来年の6月から7月中旬頃、アジサイの本当の花を観察してください。

○ **ギボウシ (擬宝珠)** ユリ(リュウゼツラン)科、多年草

原産地；東アジア、 花期；6～9月

ギボウシの仲間は東アジア特産で、大部分は日本に自生しており、古くから庭などに植えられています。



ギボウシの斑入り(左)と、斑が入っていない(右)品種

和名のギボウシ(擬宝珠)は、つぼみが、橋の欄干の柱頭についているネギの花に似た形の飾りに似ているためです(次ページ写真参照)。

ヨーロッパにはシーボルトによって紹介され、その後、アメリカにも伝えられ、多くの園芸品種が作られました。葉の色や姿、大きさに様々なバラエティがあり、園芸では葉を観賞するリーフプランツとして広く用いられています。

花壇にも白く斑入りのものと、斑が入っていない品種のものが植えられています(上写真参照)。



ギボウシの蕾、この形が名前の由来 (8/13)



ギボウシの花 (手前の細長い薄紫の花) 2016 7/17

○ **シソ (紫蘇)** シソ科、花期 ; 9~10 月

シソは、ヒマラヤやビルマ、中国に自生するハーブです。草丈は 30~100 センチで、ギザギザした葉をしています。葉の色は紫色と緑色のものがあります。秋に紫や白い花を咲かせ、冬には枯れてしまいます。

日本へは縄文時代に、中国を経由して伝えられ、奈良時代から栽培されるようになりました。もともとは薬草として利用されていましたが、室町時代から食用にされるようになり、今では薬味や刺身のつまとして料理に添えられています。

(写真 8/11)



ところでこの「紫蘇(しそ)」の名の起こりですが、

中国の後漢時代に、カニを食べすぎて食中毒を起こした若者が、シソの葉を煎じて飲んだところ健康を取り戻したという逸話から、「紫色」の「蘇(よみがえ)る葉」だということから「紫蘇(シソ)」と名付けられました。(HP HORTI から)

なお、「大葉」とは青紫蘇のことで、食用の香味野菜として販売される時の商品名です。

○ **ゼラニウム** (別名 ; テンジクアオイ・天竺葵) フウロソウ科、小低木状の宿根草

原産地 ; 南アフリカ、花期 ; 4~11 月

花色が豊富で、長期間咲き続けるので、ベランダや窓辺を華やかに演出するのに欠かせません。

ハーブや香料とて扱われる種類もあり、お菓子や香水、アロマの香料として利用されています。香りの強い品種は虫よけの効果もあるようです。

ただし、園芸品種としては、香りの軽いものが栽培されています。

・ゼラニウムの葉に香りがあるかどうか確認しましょう。



ゼラニウムの花 (7/21)

〔ゼラニウムの名前の由来〕

ゼラニウムの名前の由来を調べると、「コウノトリ」と「鶴」が出てきます。

- ① 別名「ペラルゴニウム」はギリシャ語で「こうのとりのかちばし」の意味。
かちばしの様な花の咲き方から。その鋭さから虫を寄せ付けない。(hananoomi-春夏秋冬)
- ② ゼラニウムの花名は、ギリシャ語の「ゼラノス(鶴)」が語源で、ゼラニウムの果実が「鶴のかちばし」に似ていることに由来する。(みんなブログ、kami-chan・花言葉)
- ③ ゼラニウムはフウロソウ科ペラルゴニウム属の植物の総称。ペラルゴニウムという属名はギリシャ語の「こうのとり」に由来。果実に錐状の突起があり、こうのとりのかちばしに似ているため。また、ゼラニウムはギリシャ語で鶴を意味する「ゼラノス」に由来し、果実の形を鶴に見立てた。(Ameba)

このように、「コウノトリ」か「鶴」か、それとも双方の記述もあります。

HP にアップデートされていた種子の写真(右)を見れば、確かに種子の部分がかちばしで、綿毛の部分か頭部のようにも見えます。しかし、分かったような、分からないような？
どうもすっきりとしません。



さらに検索を進めて、次の記事を見つけました。

HP ヤサシイエンゲイ http://www.yasashi.info/se_00002.htm

ただし、この記事そのまま写しても分かりにくいと思われるので、自分なりに理解した範囲で、補足しながら説明します。

ゼラニウムはゲンノショウコと同じフウロソウ科に属しています。つまり同じ仲間分類されていました。

(旧) フウロソウ科 - ゲラニウム(ゼラニウム)属 a) ; ゲンノショウコもゼラニウムも同じ仲間
次ページのゲンノショウコの写真とゼラニウムの写真を見比べてください。似ていますか？
分類の「科」も「属」も同じなら、どこか似ているはずですが、でも、花も葉も似ていませんね。



(参考) ゲンノショウコの花と葉
 同じ科なのに、どこに共通点があるのか？
 これだけでは共通点が見えない!!

それで、これらを二つの属に分けました。

(新) フウロソウ科 $\left\{ \begin{array}{l} \text{ゲラニウム(ゼラニウム)属} ; \text{ゲンノショウコ} \\ \text{ペラルゴニウム属 b)} ; \text{ゼラニウム} \end{array} \right.$

ゼラニウムにとって旧区分の「ゲラニウム(ゼラニウム)属 a)」からは「鶴」の意味が、新区分の「ペラルゴニウム属 b)」からは「こうのとり」の意味が出てくる。このような構造のようです。

(参考) ここで、さらに込み入った事情がからんできます。園芸ではペラルゴニウム属に分離された方が、古くから呼び慣れていた旧属名の「ゼラニウム」という名で呼ばれ、新たにゲラニウム(ゼラニウム)属に分類された「ゲンノショウコ」などはゼラニウムと呼ばれることはありません。

先ほど引用した①～③の HP の記事について、少しコメントします。

①の「くちばしのような花の咲き方」云々は間違いですね。花の写真を見れば一目瞭然。

③に「果実に錐状の突起」云々と書かれていますが、種子の写真(前ページ)にはそんな突起は見えません。何を言っているのだろう？と、念のためさらに検索をかけてみました。それで、この写真が見つかりました。(blog.goo 花紀行)

これですね！これを「鳥の頭部と長いくちばし」に見立てたのですね。HP には種子の写真が載っていたので、てっきりそのことしか頭がありませんでした。

「種子を飛ばす前の果実の形」が問題だったのですね。

(右) ゼラニウムの果実(blog.goo 花紀行)から



この形ならゲンノショウコも同じです。

くどいようですが、再度、ゼラニウムとゲンノショウコを比較します。

ゼラニウムは鳥のくちばしのような果実から、綿毛のついた種子が出てくる。風媒花。

(左 blog.goo

右 plaza.rakuten)



ゲンノショウコの果実も、鳥のくちばしのよう。

こちらは果実の皮がむけて、ばねの力で種が飛ばされる。この形から神輿草とも呼ばれる。



このようにゼラニウムもゲンノショウコも果実の形が似ています（種子の飛ばし方は異なります）。ここによりやくゼラニウムとゲンノショウコとの、フウロソウ科としての接点ができました。いずれもくちばしの長い鳥の頭部のようですね。

ここで、もう一度、新分類に戻ります。

(新) フウロソウ科 ← ゲラニウム(ゼラニウム)属 → ゼラノス → 鶴； ゲンノショウコ
ベラルゴニウム属 → コウノトリ； ゼラニウム

新分類ではこのように、ゲンノショウコには「鶴」が、ゼラニウムには「コウノトリ」が割り当てられているとも読めます。いずれもくちばしの長い鳥の頭部の連想です。この種子の形を見れば納得できますね。

くどいようですがもう一言追加します。一体、「鶴」と「コウノトリ」を当てはめるにはどのような違いに着目したのだろうか、と、ちょっと気になりました。が、「属」の分類の経緯を考えれば、その問い自体が無意味でしょう。「ゲラニウム(ゼラニウム)属 → ゼラノス → 鶴」の属名は当初からあって、新たにゼラニウムを分離するのに、「くちばしの長い鳥」として「コウノトリ (ベラルゴニウム属)」が選ばれただけ。そう考えるのがごく自然と思われま。

○ ヒューケラ (和名；ツボサンゴ) ユキノシタ科 常緑多年草

原産地；北アメリカ、花期；5～7月中旬

ヒューケラは葉の色のバラエティが豊富で、葉が重なるように密に茂り、コンパクトな草姿なので、

カラーリーフプランツとして寄せ植えなどに使いやすく、人気の高い植物です。常緑性ではほぼ一年中同じ草姿を保ち、ほとんど手がからず、日陰でもよく育ちます。

いくつかの園芸品種には花の美しいものも多く、赤やピンク、白の小花が群れ咲き、花壇やコンテナをにぎやかに彩ります。

葉も、緑葉のものから黄色や赤紫色の葉、そして斑入りの葉など、色や模様は変化に富んでいます。

花壇にも緑の葉と赤紫色の葉のものが植えられています。 (上) ヒューケラの花と全体。(7/21)



【ヒューケラの名前の由来】



ドイツで医学と植物学の教授をしていたホイハーという人物にちなんで名づけられた。

発音は本来は「ヒューケラ」ではなく「ホイヘラ」、当初通販などでは「ホイヘラ」という品名で販売されていたが、最近では英語読みで「ヒューケラ」と呼ばれるのが一般的になった。

(HP plant-gift 植物の贈り物、
otonakawaiigardening 植物と暮らしたい)

和名の「ツボサンゴ(壺珊瑚)」は、釣鐘のような赤褐色の小花の様子がサンゴに似ていることから名付けられた。(写真上 ちいさな釣鐘のような花 7/29)

※ ユキノシタ科ということは、野草のユキノシタの仲間という事です。



(左) ヒューケラの葉、(中、右) ユキノシタの葉と花。花は似ていませんが、葉がよく似ていますね。

※ この区画には以上の他に、サルビア、ナデシコ、ニチニチソウ、ペコニア、マリーゴールドが植えられています。これらについては「前篇」を参照してください。

〔コーヒーブレイク・2〕

(1) ハーブとは？

一般的にヨーロッパでは、香草類一般を指します。薬草でありスパイスとしての有用な植物です。香があるものでも、大量に生産されるものや野菜は除外され、少量を料理の風味付けのために使うキッチンハーブをさすことが多いです。

花壇の花を見てきた中にも、ハーブにはシソ科が多いですが、シソ科の特定の植物をさすわけではなく、ハーブは香りがあるって食用とされるもの全般を指す言葉で、多種あり、それぞれ性質が違います

ガーデニング花図鑑「ハーブ」 <http://sodatekata.net/flowers/page/337.html>

※ 今回の解説は、「観察」し、「調べる」事を主にしていますので、ハーブの効用については簡単に記すだけにしました。それに、私自身がハーブに関してはまったくの門外漢です。

(2) 植物観察をもっと楽しく

① 植物観察は「油断大敵」

「今はどんな花が咲いているだろうか」と思い立って、ちょっと見に行っても、花が見られるとは限りません。それぞれの植物は、それぞれに、芽を出し、成長し、蕾を出し、咲いて、そして散っていきます。それに花が咲いている期間も短いものが多い。図鑑で花期を調べても、それは一般的な、おおよその期間でしかありません。そして、年によって例年より暑かったり、寒かったりで、花期もずれてくるでしょう。その事情は、植物によって異なります。

ですから、身の回りの植物の、それぞれの旬の花を見るには、頻繁に見に行くしかありません。仕事が忙しいからと後回しにしていれば、確実にその花の旬を見逃してしまうでしょう。

ですから、植物観察は「油断大敵」なのです。

といっても、年中見て回れるわけではありません。変化の乏しい夏季・冬季は旬ごとに月3回程度。変化の大きい春季は最低でも週2回くらいは見て回る必要があります。(秋季も多めに)。私はこのようにしてきました。

② 花の性質を観察しましょう

花壇にさまざまな花が咲いていても、みな同じ咲き方とはかぎりません。

- ・ 晴れの日に咲いていても、曇りや雨、そして夜間に、花や葉を閉じるもの、
- ・ 夜咲いて、朝閉じる花
- ・ 朝咲いて、夕方には閉じる花
- ・ 昼も夜も、ずっと咲き続ける花

これらを観察するには、

- ・日中と夕方・夜間に見に行く。
- ・晴れの日とともに、曇りや雨の日にも見に行く。
- ・朝早く見に行き、何時頃花が開くのかを観察する。

このような、さまざまな工夫が必要です。

③ 本当の花を探してみましよう

一見、花のように見えても「萼(がく)」の変化したものと説明されている花も少なくありません。そこに見えているのが「萼(がく)」なら、本当の花がどこかに隠れているはずですよ。

今回も、アジサイ(萼 がく)、センニチコウ(苞 ほう)がそうでした。そんな時はぜひ本当の花を探してみましよう。

日常見慣れている花とは違う、もうひとつの花の姿が見えてきます。

④ 花の写真は、その植物の特徴をとらえるように工夫しましよう

花の写真はただ美しく撮ればよいのではなく、その植物の特徴をとらえたものがよい写真と言えます。私も、初めは何気なく撮って、後で資料を調べ新たな事実を知り、肝心な事を撮っていないことに気づき、何度も撮り直しています。

⑤ 植物の名前を調べる時に、何科の植物かも見ておきましよう

- ・同じ科の植物は、花や葉に似通ったところが多い。
- ・シソ科には香りがあるものが多かった。
- ・ヒューケラとユキノシタ ➡ 同じユキノシタ科なので、葉が似ていた
- ・ゼラニウムとゲンノショウコ ➡ 同じフウロソウ科なのに違いがあった。

「科」の下の「属」の分類が異なっていた、そして「鶴」と「コウノトリ」の関連がありました。

このように「科」を知ることは、植物の理解への一歩となります。

⑥ 植物の名前の由来を調べてみましよう

- ・ローズマリー、マリーゴールド ➡ 聖母マリアとの関係がありました
 - ・ペチュニア、ロウヤガキ ➡ ツクバネ ➡ 羽根つきの羽根の連想
 - ・ナデシコ=撫でし子、メランポジウム=黒い茎 などの面白い名づけ方
- 名前の由来を調べてみると、時々面白い事にぶつかります。

⑦ 図鑑、参考書、HP など、必ず複数の資料を参照しましよう

今回紹介しました中では、ポーチュラカが HP によって、一日花か否かの説明が食い違っていました。また、バジルの和名「メボウキ」の説明が、HP によってそれぞれニュアン

スが異なっていました。このような事は多々おこります。

HP の場合は、植物学者や専門家ばかりでなく一般の人もアップデートしていますので、このような食い違いが起りやすいと思います。この事は、植物学者や専門家が執筆している図鑑や参考書でも無いわけではありません。

ですから、利用者としての私たちは、ひとつの資料を調べてそれで終わりとししないで、必ず二つ以上の資料を読み比べていくようにしてください。90%以上同じことが書いてありムダのように思えますが、資料を読み比べることは大切な事です。

⑧ 疑問に思ったらとことん調べましょう

この後編の中でも、バジルの「メボウキ」や、ゼラニウムの「鶴かコウノトリか」など、何か所かくどいほどに資料検索して調べています。資料を調べて納得できなかったら、とことん調べてみましょう。その結果、何か得るところがあると思います。

〔最後に〕

① 今回の資料作成には、「wikipedia」「ヤサシイエンゲイ」「みんなの趣味の園芸」ほか、さまざまな HP、あるいはブログを参考にさせていただきました。ありがとうございます。出典を明記したところも、していない所も混在していますが、ご了承ください。

② もうひとつ、お詫びしなければならない事があります。この「花壇の花を調べてみよう」は 7 月下旬から作業を始めました。当初は、夏休みに入った子供さんたちに、植物観察のヒントになるようなものにしようと考えていました。ところが、検索に手間取り、私のまとめの作業も遅く、2 カ月ほどもかかってしまいました。

夏休みはすでに終り、花壇の花も次々と盛りが過ぎてしまいました。来年の花壇はまた模様替えすることになるでしょう。つまり、この資料はほとんど使い物にならないものになってしまいました。せいぜい、さらっと目を通していただき、観察や資料調べの参考にでもしていただければ幸いです。

③ 今回はページ数も多くなりましたので、「前篇」「後篇」に分割しました。と同時に、前篇・後篇でまとめ方が少々変わってしまいました。前篇は観察を主に、植物名は参考でした。後篇は観察が基本でありながら、「調べる」事が前面に出てしまいました。「調べる＝検索」しながら、同時進行でまとめています。見方によっては、かなりくどく、理屈っぽくなってしまったかと思います。でも、「どのように疑問をぶつけ、どのように調べていったか」を記す事も、何かの参考にしていただけるかなと思っています。

言い訳がましくなりましたが、そんなわけですので、ご了承ください。

〔 2017/9/20 写真・文 石川 〕